

大学等名 九州産業大学

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

理工学部教授会

(責任者名) 牛見 宣博

(役職名) 理工学部長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	履修や成績を担当している教務部が、対象科目の受講者数、単位の修得状況等を把握しており、状況に応じて開講クラス数の調整等を行い希望する学生が問題なく受講できるよう対応している。 教員は、K'sLife(学生、教職員が利用する教育プラットフォーム)を使って学生の出席状況の確認やレポート課題の配信及び提出状況を把握できるようになっており、学修の進捗状況をリアルタイムで把握できる。 令和6年度は、対象科目の受講者総数が1,325名、単位修得率が88.1%となった。
学修成果	学修成果を把握するため、履修や成績を担当している教務部において、開講クラス数や対象科目の履修者数などの状況、単位修得状況等の数値データと、大学評価室が実施する授業評価アンケートの結果と併せて分析を行っている。 教務部は、客観的なデータである学部、学年別の受講状況や単位修得状況に加え、授業評価アンケートの中から、受講の動機、授業の内容に関する事項等で授業に対するモチベーションや満足度、学修成果に関する事項でどのような成果が得られたかを分析し、併せて自由記述欄の記載事項をまとめる。 その結果については、教授会で共有し、本プログラムの評価・改善に活用している。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	令和6年度は、対象科目の単位修得率が88.1%となった。 授業評価アンケートの結果でも、「授業の進度は適切でしたか。」という設問に対しては、75.9%が「適切である」と回答している。また、「授業での学びを通して学習意欲が引き出され、関連する題材や分野への関心が高まりましたか。」という設問についても、65.3%が「とてもそう思う」、「そう思う」と回答している。 自由記述欄でも、「AIのことを深く学ぶことができたのでよかった」、「スライドや説明がわかりやすく、意欲的に取り組めた」等の記述があった。 授業評価アンケートの結果、単位修得の状況から、受講生は概ね内容を把握しており、高い理解度を獲得していると言える。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	令和6年度は、対象科目の単位修得率が88.1%となった。 授業評価アンケートの結果でも、「総合的にみてこの授業を履修して良かったと思いますか。」という設問に対しては、71.1%が「とてもそう思う」、「そう思う」と回答している。 自由記述欄でも、「プログラミングの方法と楽しさを知る事が出来た」、「AIの様々な役割を知れて良かった」、「わからないところがあればいつでも聞ける」等の記述があり、今年度受講した学生が、次年度以降に後輩や、同学年の学生に推奨することが考えられる。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	「理工学部数理・データサイエンス・AI教育プログラム」は、令和6年度から開始した理工学部のプログラムである。同プログラムの履修要領を、学生便覧の閲覧頻度の高い理工学部履修規程と併記すると共に、入学後の各種ガイダンスにおいて、同プログラムについての説明を行い、積極的な履修を呼びかけた。プログラム開始の2年目となる令和7年度は、進級時のガイダンスにおいても再周知し、履修者数・履修率を向上する取組みを行っている。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	令和6年度から開始したプログラムのため、現時点においては修了者はいない。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	理工学部では、自己点検・評価活動の客観性・公平性を担保し、教育の質の向上を図ることを目的として、産業界の方を招き産学懇談会を行っており、本教育プログラムについても意見聴取を行う。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	全学基礎教育科目である「AI導入」を履修させることで身近な内容から学修を始める。貸与PC等の利用で演習も行っており実際に体験させることで、興味・関心を喚起するとともに、今後の社会において必要になる知識であることを認識させて、受講の意義付けを行うよう工夫している。 併せて、修了証の授与等についても周知しており、受講の動機付けを行う。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載	内容・水準を維持・向上のため、理工系の学部として最低限必要な数理的な素養とプログラミングの技術を学ぶ科目を必修とした。 貸与PCを持っていることから、授業中及び授業外において、実際に演習を行いながら、学ぶことができる。